

◆◆◆セミ◆◆◆

■朝の校門。

「校長先生、これあげる」と子どもたち。
見ると、セミの抜け殻がたくさん。
ついこの間まではダンゴムシだったのですが…。
それにしてもセミの声の元気のよいこと。
暑さが二割増しくらいになる感じです。
セミというと私にはこんな思い出があります。



■私が小学生のころ。昭和50年前後の話です。

夏の朝は、自宅のすぐ隣のお宮から響いてくるセミの声で目が覚めていました。
スマホもゲームありません。社会体育だって今ほどにさかんでなかった時代です。
私たち小学生男子の夏の遊びといえば、お宮で木登りかセミとりでした。
お宮には虫とり網と籠をかかえた子どもたちが群れていました。
木登りが得意だった私は、高い木に登りセミを次から次につかまえていました。
「木登り名人」「セミとり名人」とおだてられすっかり調子にのっていました。

■とったセミは、たいていその場で逃がしていました。

が、ある時私はいいことを思いつきました。
「たくさんのセミたちを部屋に放してセミ部屋をつくったらどんなに素敵だろう…」
さっそくお宮にくり出して籠いっぱいセミを確保。
急ぎ自宅に戻りました。そして一番広い部屋を閉め切りました。
セミがとまれるようにカーテンをしました。セミたちを籠から出してみました。
ワクワクしてようすをうかがっていました。
ところが。
カーテンや壁にとまったセミたちは不思議なことにちっとも動きません。
だれも鳴きもしません。お宮ではジージーとあれほどうるさく鳴いていたのに。
しばらく待ってみましたが部屋はしいんとしたままです。
待つことに飽きた私は自分の部屋に戻りました。

■次の朝。

「そうだ、セミ部屋どうなったかな」セミたちのことをすっかり忘れていた私。
セミ部屋をのぞきに行きました。部屋の中は相変わらずしいんとしています。
ふと目を落とすと、そこらじゅうにセミたちの死骸が転がっています。
私はなんだかおそろしくなって、だまってセミの死骸をお宮に持って行きました。
辺りをうかがい、だれもいないことを確かめて土に埋めました。
今こうして思い返したとき、私はその時はじめて生き物の命を奪うことの罪悪感の
ようなものを感じ、命の尊厳に気付いたのかも知れません。